

平泉無量光院跡出土の擦文土器

— 擦文文化集団と平泉の集団の交流についての予察 —

鈴木琢也

Key Words

擦文土器 (Satsumon earthenware)、中世陶磁器 (Medieval ceramic)、かわらけ (Kawarake)、文化交流 (Cultural exchange)、平泉 (Hiraizumi)

1 はじめに

鈴木 (2006a, 2011) は、10～11世紀にかけて擦文文化集団が石狩低地帯から北海道全域に拡散していくこと、これらの地域に青森県五所川原産須恵器や本州産鉄製品などの分布が拡がり、青森地域の東北地方土師器文化集団との「日本海ルート」、「太平洋ルート」による交流が活発化したことを指摘した。この時期には北海道全域に本州産製品の流通が拡がっていくものの、その分布が多くみられるのは石狩低地帯であり、この地域が本州との交流の拠点であったと想定される。

しかし、12～13世紀には前代 (10～11世紀) の交流の様相が変化していく状況がうかがわれる。このことについて、鈴木 (2016) は北海道における本州産製品 (12～14世紀前半) の分布状況を検討し、12～14世紀前半には本州との交流の拠点地域が、石狩低地帯から北海道南西部～西部日本海沿岸、北海道南西部～南部太平洋沿岸の河川河口～中流域などの海岸や河川の湊に適した地域に移り変わっていく状況がみられること⁽¹⁾、これらの地域に本州の集団の進出がはじまる可能性があることを指摘した。さらに、鈴木 (2016, 2020) や八重樫 (2016) は、北海道の厚真町宇隆1遺跡から出土した常滑陶器壺は12世紀における常滑陶器最大の消費地である平泉 (岩手県平泉町) と北海道南部太平洋沿岸域との関りを示すものであり、この時期に平泉の集団と上記の地域の擦文文化集団との交流が展開していたことを指摘している。

このように、鈴木 (2006a, 2011, 2016, 2020) は、主に10～14世紀にみられる本州産製品の北海道への流通を比較検討することにより、12世紀には北海道における交流の拠点地域が石狩低地帯から北海道南西部・西部・南部に移り変わっていくとともに、擦文文化集団と平泉の集団との交流が展開することを指摘してきた。

一方、この12世紀における擦文文化集団と平泉の集団の関係を、北海道及び東北地方北部から出土した擦文土器の分布動態などから考察する研究は進んでいないのが現状である。これは、後述するように擦文土器の分布が青森県域や秋田県域北部では多数確認されているものの、これまで平泉を含めた岩手県域では確認されていなかったことによる。

このようななかで、2017年に実施された岩手県平泉町の無量光院跡第37次発掘調査で調査区から擦文土器が検出されたことは大きな成果であり、この擦文土器の検討を通じて擦文文化集団と平泉の集団との交流の様相を考察することが可能な状況になった (平泉町教育委員会編 2019)。

このことをふまえ、本稿では平泉無量光院跡から出土した擦文土器の出土状況、特徴や年代の検討を通じて、擦文文化集団と平泉の集団との交流の様相について考察する。また、平泉無量光院跡出土の擦文土器の年代をもとに、擦文土器の終末年代についても若干の考察を試みる。

なお、本稿で使用する平泉の集団とは、平泉を拠点とした平泉藤原氏及びその勢力下の集団を想定している。

2 平泉無量光院跡から出土した擦文土器

擦文土器は北海道だけでなく、東北地方北部の青森県域や秋田県域北部を主体とする地域でも多数出土している。齋藤 (2002, 2008, 2011, 2012) は、東北地方北部から出土した擦文土器及びその範疇に含まれるとする土器群を擦文 (系) 土器と指定し⁽²⁾、その出土遺跡は津軽地方や下北地方などを中心に160ヵ所を越えると報告している。そして、この擦文 (系) 土器を北奥Ⅰ～Ⅴ類の5類型に分類して9～11世紀の年代に位置づけたうえで、北奥Ⅰ・Ⅲ類土器が卓越する「A：陸奥湾周辺地域 (外浜、下北、上北北部)」、北奥Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類土

器が卓越する「B：岩木川・米代川流域（津軽、西浜、能代、北秋田、鹿角）」、擦文（系）土器が欠落する「C：青森県南地域（上北南部、八戸、三戸）」の三地域に大別している。このように、擦文（系）土器の主要な分布圏はC青森県南地域を除く青森県域と秋田県域北部であり、岩手県域では分布が確認されていなかった。

しかし、先述の岩手県平泉町の無量光院跡第37次発掘調査で調査区から擦文土器が出土したことにより、その分布が岩手県域南部に及ぶことが明らかになった（図1、写真1、平泉町教育委員会編 2019）。しかも、擦文土器が平泉藤原氏の拠点である平泉の無量光院跡から出土したことは重要であり、東北地方北部あるいは北海道の擦文文化集団と平泉の集団との交流の様相を検討する要素になるものと考えられる。

ここでは、平泉無量光院跡から出土した擦文土器の出土状況、特徴や年代の検討を通じて、擦文文化集団と平泉の集団との交流について考察する。

（1）擦文土器の出土状況

平泉町教育委員会編（2019）によると、擦文土器は平泉無量光院跡（第37次発掘調査区）の3号土坑、2号溝、5号溝、調査区北部・北西部・中央部の整地層（無量光院造成時の土塁が構築される以前に整地された層）、包含層から出土している（図1-1～5、写真1-1～5）。

3号土坑は、平泉無量光院造成時に構築された土塁（12世紀後半）、5号溝と重複しており、それらより3号土坑のほうが古いとされている。また、埋土は人為堆積の様相を呈するとされ、下層・中層・上層の3層からなる。この3号土坑から擦文土器（図1-1～5、写真1-1～5、小破片）、かわらけ（図1-6・8～10・13～18、写真1-6・8～10・13～18）、白磁（図1-21、写真1-21）のほか、鉄鏃、鉄滓、木製品などが出土した。擦文土器は中層及び上層より出土し、白磁は上層から出土している。このかわらけ、白磁の年代は12世紀前葉であり、3号土坑が土塁（12世紀後半）より古い時期につくられていることから、3号土坑の年代は12世紀前葉とされている。また、最下層の炭化物の放射性炭素年代測定（AMS）を行った結果、11～12世紀の値が得られたと報告されている。

2号溝は、3号土坑と重複しており、2号溝のほうが新しいとされている。この2号溝から擦文土器（小破片）、かわらけ（図1-11・12、写真1-11・12）、渥美陶器（図1-19、写真1-19）などが出土した。このかわらけ、渥美陶器の年代は12世紀前葉であり、このことから2号溝の年代は12世紀代とされている。

5号溝は、平泉無量光院造成時に構築された土塁（12世紀後半）、整地層、3号土坑と重複しており、土塁と

整地層より5号溝のほうが古く、3号土坑より5号溝のほうが新しいとされている。この5号溝から擦文土器（小破片）、かわらけ（図1-7、写真1-7）、渥美陶器（図1-20、写真1-20）、鉄滓、木片、種子などが出土した。このかわらけ、渥美陶器の年代は12世紀前葉であり、5号溝が土塁（12世紀後半）より古い時期につくられていることから、5号溝の年代は12世紀前半とされている。

整地層は、無量光院造成時の土塁が構築される以前に整地された層を指し、土塁構築層（V層、12世紀後半）の下層が整地層（VI層）である。整地層からは擦文土器（小破片）のほか、12世紀前葉のかわらけ、常滑陶器、渥美陶器、白磁、褐釉陶器などが出土した。

このように、3号土坑、2号溝、5号溝、整地層から、擦文土器（図1-1～5、写真1-1～5、小破片）と、12世紀前葉のかわらけ、国産陶器、中国産陶磁器（図1-6～21、写真1-6～21など）が出土し、7世紀～11世紀代の古代の土師器が出土していないことから、擦文土器の年代については11世紀末～12世紀前葉と報告されている。

（2）擦文土器の特徴と年代

平泉町教育委員会編（2019）の刊行にあたり同教育委員会から依頼を受けて、図1-1～5（写真1-1～5）などの平泉無量光院跡出土の擦文土器を実見し特徴や年代について検討した。その結果、図1-1～3・5（写真1-1～3・5）の擦文土器は長胴甕であり、胴部に一段あるいは複数段の文様帯を形成し鋸歯状の沈線文を施していることから、宇田川（1980）の北海道擦文土器の編年によると擦文後期～晩期に分類されることを指摘した。鈴木（2005、2006b）では、この擦文後期～晩期の土器の年代を11～12世紀に位置づけている。さらに、これらの擦文土器にみられる粗雑な鋸歯状の沈線文は、擦文後期後半～晩期の土器にみられる文様の特徴であり、その年代を詳細に示すと11世紀後半～12世紀の年代に位置づけられる。

また、先述のように平泉町教育委員会編（2019）は図1-1～5（写真1-1～5）などの擦文土器を、12世紀前葉のかわらけ、国産陶器、中国産陶磁器との関係などから11世紀末～12世紀前葉の年代に位置づけている。先述の3号土坑は、構築時期が12世紀後半と明確な土塁より古く、12世紀後半以前の年代であり、この年代は3号土坑の出土遺物である12世紀前葉の白磁やかわらけの年代とも整合する。つまり、3号土坑の年代は12世紀前葉と考えられ、そこから擦文土器と上記の白磁やかわらけが出土している。さらに、無量光院造成時の土塁（12世紀後半）が構築される以前に整地された層（整

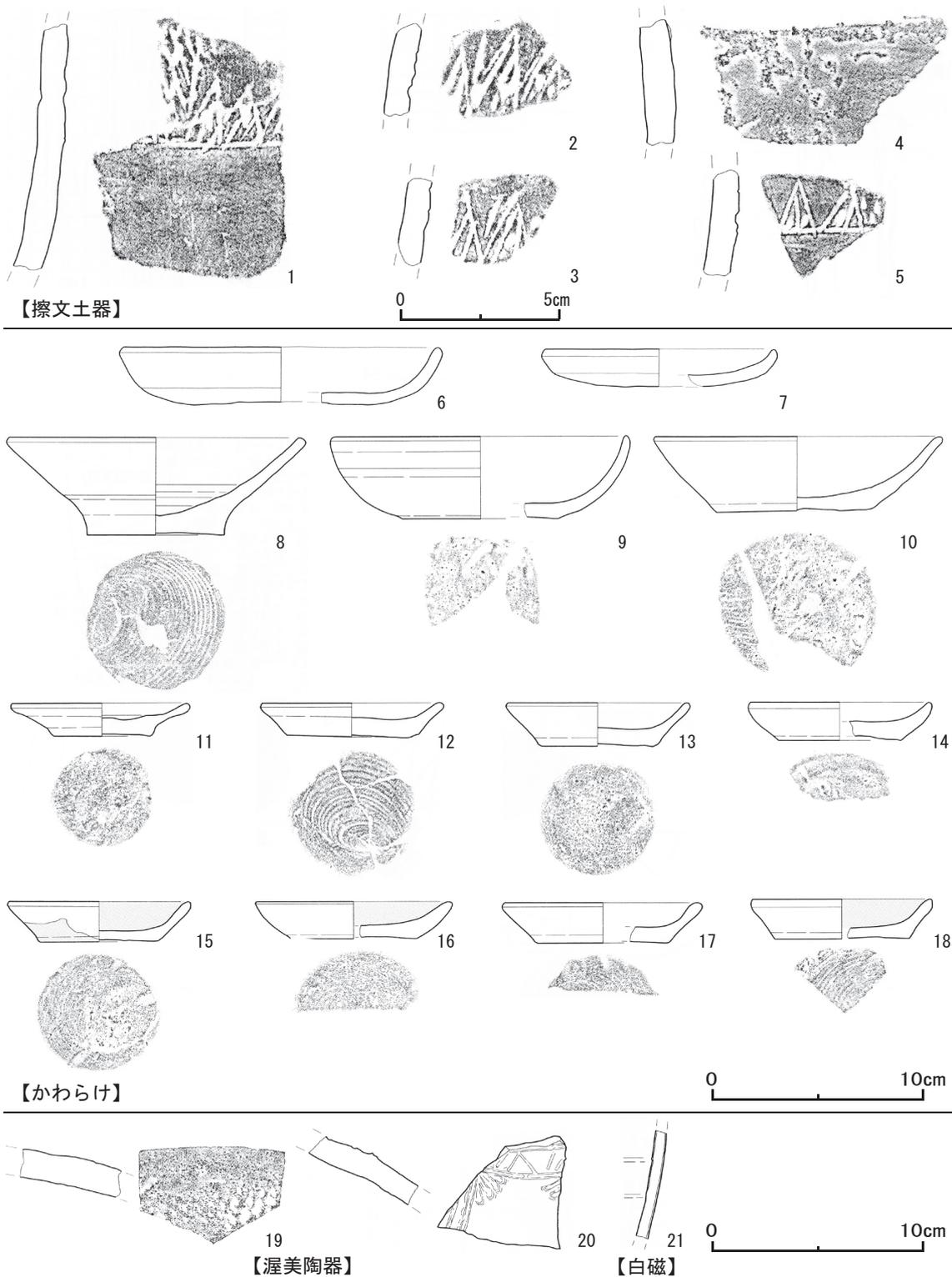


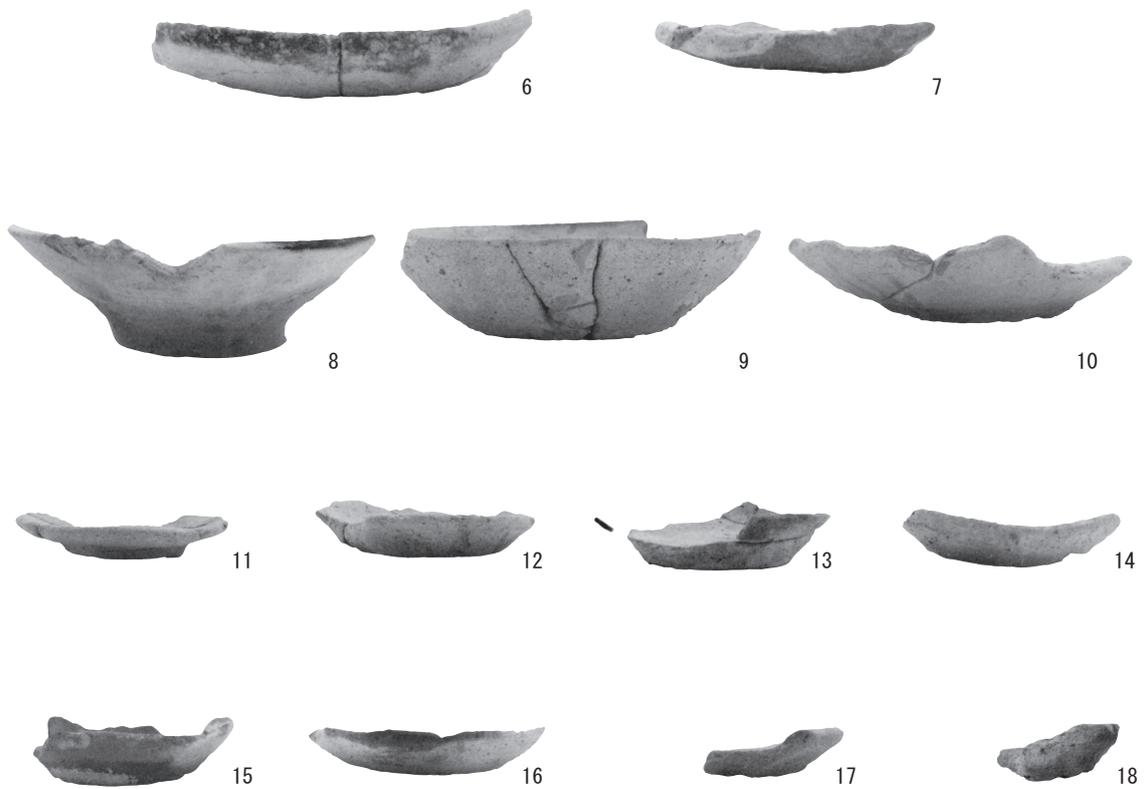
図1 平泉無量光院跡から出土した擦文土器・かわらけ・陶磁器

3号土坑出土：擦文土器（1～5）、かわらけ（6・8～10・13～18）、白磁（21）、2号溝出土：かわらけ（11・12）、渥美陶器（19）、5号溝出土：かわらけ（7）、渥美陶器（20）※2号溝、5号溝からは擦文土器（小破片）が出土している。

（平泉町教育委員会編 2019掲載の実測図を使用して作成。）



【擦文土器】



【かわらけ】



【渥美陶器】

【白磁】

写真1 平泉無量光院跡から出土した擦文土器・かわらけ・陶磁器

3号土坑出土：擦文土器（1～5）、かわらけ（6・8～10・13～18）、白磁（21）、2号溝出土：かわらけ（11・12）、渥美陶器（19）、5号溝出土：かわらけ（7）、渥美陶器（20）

（平泉町教育委員会編 2019掲載の写真を使用して作成。1～5：S=1/2、6～21：S=1/3）

地層)からも、擦文土器(小破片)と12世紀前葉のかわらけ、常滑陶器、渥美陶器、白磁、褐釉陶器が出土し、2号溝、5号溝からも擦文土器(小破片)と12世紀前葉のかわらけ、渥美陶器が出土している。

したがって、3号土坑から出土した擦文土器(図1-1~5、写真1-1~5、小破片)及び、整地層、2号溝、5号溝から出土した擦文土器(小破片)の年代を11世紀末~12世紀前葉とする平泉町教育委員会編(2019)の見解は妥当であると考えられる。

これらのことから判断して、平泉無量光院跡出土の擦文土器は11世紀後半~12世紀前葉の年代に位置づけられる。

なお、平泉無量光院跡出土の擦文土器は、齋藤(2002、2008、2011、2012)の東北地方北部の擦文(系)土器の分類や編年によれば北奥Ⅲ類土器(11世紀前半)の範疇に含まれる可能性が考えられ、先述した本稿の年代と若干の差異がある。このことに関連して、山戸(2015)は北海道と東北地方北部の擦文土器編年を整理・比較し、齋藤(2002、2008、2011、2012)の北奥Ⅲ類土器は少なくとも11世紀前半以降の年代に位置づけられると指摘している。この山戸(2015)の指摘や本稿での検討をふまえると、北奥Ⅲ類土器の存続時期が11世紀後半~12世紀前葉までのびる可能性(存続時期の地域差も含め)を検討していく必要があるだろう。また、平泉無量光院跡出土の擦文土器が北奥Ⅲ類土器とは異なる、それよりもう一段階新しい時期の土器として分類できる可能性も考慮しなければならない。このことについては、東北地方における擦文土器(11世紀後半~12世紀前葉)の出土事例の増加をまち、今後の課題としたい。

(3) 擦文土器からみた交流の様相

平泉無量光院跡出土の擦文土器の特徴と年代を考察してきたが、ここで問題となるのは、これらの擦文土器がどの地域でつくられたものかということである。平泉無量光院跡出土の擦文土器の胎土の様相や器壁が厚いことなどは北海道の擦文土器とは異なるものであり、平泉町教育委員会編(2019)によると擦文土器の胎土は海綿状骨針(片)を多く含み、平泉で出土している12世紀前葉のかわらけの胎土と共通するとされている。

したがって、この擦文土器は青森県域や北海道などから平泉に持ちこまれたものではなく、擦文土器をつくる技術をもつ人々が、平泉あるいは周辺地域で製作した可能性が高い。すなわち、平泉から出土した擦文土器は、直接的に青森県域や北海道からもちこまれたものではないと考えられるが、11世紀後半~12世紀前葉の時期に東北地方北部あるいは北海道の擦文文化集団と平泉の集

団との間に人的な交流があったことを示すものであると考えられる。

3 擦文土器の終末をめぐる問題

先述した平泉無量光院跡出土の擦文土器は、擦文土器の終末年代を示す一つの事例になるものと考えられる。ここでは、平泉無量光院跡出土の擦文土器の年代をもとに、擦文土器の終末年代について若干の考察を試みる。

北海道を中心に擦文土器の終末年代を考察した研究には多くの蓄積があり、それらを大きくまとめると次のような見解がみられる。

一つ目は、擦文土器の終末年代は北海道(東北地方を含め)においてほぼ同時であるとする見解である。具体的には、①珠洲陶器や内耳鉄鍋、内耳土鍋などの時期的な前後関係から終末を12~13世紀とするもの(石附1976、菊池1980)。②商品流通の発展による擦文社会での急速な物質的变化を根拠に終末を13世紀後半~14世紀前半とするもの(高杉1982)。③東北地方北部土器編年との関わりから終末を11世紀末~12世紀前葉とするもの(三浦2004)などがある。

二つ目は、終末年代には地域差があるとする見解である。具体的には、①東北地方北部での防御性集落と土師器の終焉との関連から、東北地方北部と道南~道北部日本海沿岸域の終末を11世紀末~12世紀初頭、道内他地域の終末を12世紀末~13世紀初頭とするもの(瀬川2005)。②珠洲陶器や須恵器との時期的な前後関係などから道南~道北部日本海沿岸域の終末を11世紀後半、道内他地域の終末を13世紀代とするもの(塚本2002)。③同様に珠洲陶器との時期的な前後関係などから東北地方北部と道北部日本海沿岸域の終末を12世紀代、道内他地域の終末を13世紀代とするもの(中田1996)。④日本海沿岸交易の発達による本州産製品の北海道への波及のあり方から、道北部日本海沿岸やサハリンの終末を12世紀前半、道東部の終末を13世紀代とするもの(澤井1998)。⑤鉄鍋との時期的な前後関係や湖州鏡との共伴関係から道南部・道央部の終末を12世紀代、道東部の終末を13世紀前半とするもの(越田2003)。⑥AMS年代の検討から津軽の終末を12世紀前半、道央部以東の終末を12世紀後半~13世紀前葉とするもの(鈴木2004)などがある。

三つ目として道央部の終末を13世紀代、道東部の終末を14世紀代とするもの(天野・小野2004;小野2007)。道南~道央部の終末を12~14世紀、道北~道東部の終末を14~17世紀とするもの(大井2004)など終末年代を新しくみるものもある。

また、近年、擦文土器の詳細な編年を提示した榊田

(2016)は、擦文第5期を最終段階の土器とし、湖州鏡(年代を12世紀代と想定)との共伴関係から、その年代を11世紀後葉～12世紀代に位置づけている。しかし、現状では擦文土器の下限年代を推定する有効なデータが得られていないことから、今後の資料の増加次第ではさらに年代がくだる可能性があるとして、擦文土器の終末年代について慎重な検討が必要であると述べている。

一方、先にも少しふれたが東北地方北部を中心に擦文(系)土器の終末年代を考察した代表的な研究に齋藤(2012)がある。齋藤(2012)は東北地方北部の土師器と擦文(系)土器の共伴関係を検討するなかで、大鳥井山Ⅱ群土器(11世紀前葉～中葉)併行の土師器に擦文(系)土器が共伴し、それ以降の時期の土師器には共伴していないことなどから、擦文(系)土器の終末を11世紀前半としている。そして、北海道の擦文土器についても言及し、道央部の終末を11世紀後半、道東部の終末を12世紀半ばと想定している。

このように、擦文土器の終末年代については、諸説が展開され共通理解に至っていないのが現状である。これまで擦文土器と、本州のかわらけや陶磁器などの共伴例が確認されていなかったことが、その大きな要因であろう。

このようななかで、先述のように平泉無量光院跡の同一遺構・層位から擦文後期後半～晩期の擦文土器と、12世紀前葉のかわらけ、国産陶器、中国産陶磁器が出土したことは、擦文土器の終末年代を推定するための新たな要素となる。平泉無量光院は平泉藤原氏三代の藤原秀衡が建立した寺院であり、その造営年代や土塁の構築年代が遺跡の検討や文献史料の記述から12世紀後半と明確にされている。したがって、その土塁構築にあたり地業がおこなわれた整地層や、土塁構築以前の遺構である3号土坑などから、12世紀前葉のかわらけ、国産陶器、中国産陶磁器とともに出土した擦文土器の年代を11世紀後半～12世紀前葉に位置づけたことは適切であると考えられる。しかも、これらの整地層や3号土坑などから7世紀～11世紀代の古代の土師器が出土していないことも、上記の年代観を裏づける要素になる。さらに、これまで東北地方及び北海道において、12世紀後半の珠洲陶器(I期)に共伴した擦文土器はみられなかった。

つまり、これらの事例から東北地方における擦文土器の終末年代を12世紀前葉ころとすることができる。このことは、年代を推定する有効なデータが得られず、明確化されていない北海道の擦文土器の終末年代を検討するうえでも重要な事例になると考えられる。

4 おわりに

平泉無量光院跡から出土した擦文土器は、11世紀後半～12世紀前葉の年代に位置づけられる。また、この擦文土器は、直接的に青森県域や北海道からもちこまれたものではないと考えられるが、11世紀後半～12世紀前葉の時期に、東北地方北部あるいは北海道の擦文文化集団と平泉の集団との間に人的な交流があったことを示すものである。

一方、鈴木(2016、2020)が指摘しているように、北海道の厚真町宇隆1遺跡から出土した常滑陶器壺は、12世紀における常滑陶器最大の消費地である平泉と北海道南部太平洋沿岸域との関わりを示すものと考えられる。また、『吾妻鏡』文治五年九月十七日条(1189年)に記されている寺塔已下注文には、平泉藤原氏二代の藤原基衡から仏像の造立にあたった仏師への報酬として北海道など北方地域の産物と考えられる鷲羽や水豹皮が送られた記事がみられ、平泉藤原氏が北海道など北方地域の産物を入手していた状況もうかがわれる。これらのことから12世紀に擦文文化集団と平泉の集団との交流が展開していたことが補強されるであろう。

すなわち、12世紀には、東北地方北部あるいは北海道の擦文文化集団と平泉の集団による交流が展開していたと考えられる。

また、平泉無量光院跡から出土した擦文土器は擦文後期後半～晩期のものであり、この擦文土器が12世紀前葉のかわらけや白磁とともに出土していることから、東北地方における擦文土器の終末年代は12世紀前葉ころと考えられる。このことは北海道における擦文土器の終末年代を検討するうえでも重要な事例となる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、鈴木博之氏・島原弘征氏・菅原計二氏(平泉町教育委員会)、八重樫忠郎氏(平泉町観光商工課長)、飯村均氏(公益財団法人福島県文化振興財団)、池谷初恵氏(伊豆の国市教育委員会)、及川真紀氏(奥州市教育委員会)、乾哲也氏・奈良智法氏(厚真町教育委員会)、浅野敏昭氏・小川康和氏(余市町教育委員会)、直江康雄氏(千歳市教育委員会)、長町章弘氏(恵庭市教育委員会)に資料調査のご協力をいただくとともに、貴重なご教示を賜った。記して感謝の意を表すものである。

なお、本稿はJSPS科学研究費学術研究助成基金助成金基盤研究(C)「北方交易の展開にともなう擦文文化集団の拡散についての考古学的研究」(課題番号20K01084、研究代表者:鈴木琢也)の成果の一部である。また、JSPS科学研究費補助金基盤研究(B)

「官衙機構の動態からみた古代日本における境域の特質」（課題番号：18H00747、研究代表者：林部均、研究分担）、同基盤研究（B）「平泉仏教文化の諸相とその社会基盤に関する資料学的研究」（課題番号：20H01313、研究代表者：七海雅人、研究協力）の一部を使用させていただいた。

註

- (1) 石狩低地帯において12～13世紀の擦文文化の遺跡（竪穴住居址）分布が少なくなる要因について、山浦（1983）や越田（2011）は平地式住居が発掘調査で確認されにくいことを前提に、この時期に竪穴住居にかわり平地式住居が採用されたことにより住居址が認識されにくくなったこと、擦文土器が使用されなくなり木器、漆器など腐朽・消失しやすい遺物が主体となったことにより、見かけ上遺跡が減少したようにみえると述べ、越田（2011）は実際には依然として大量の物資が安定して供給されていたと指摘している。
- (2) 齋藤（2002・2008・2011・2012）は本来的な擦文土器の範疇から外れると認識されていた「第三の土器」「第四の土器」「青苗文化の土器」を包括して擦文（系）土器としている。

引用文献

- 天野哲也・小野裕子 2004. オホーツク・擦文・擦文文化終末期の問題. 北東アジア国際シンポジウム「サハリンから北東日本海域における古代・中世交流史の考古学的研究」予稿集. 第1分冊. pp. 103-110. 中央大学文学部日本史研究室.
- 石附喜三男 1976. 擦文文化の終末年代に関する諸問題. 江上波夫教授古稀記念論集 考古・美術編. pp. 29-50. 江上波夫教授古稀記念論集刊行会.
- 宇田川 洋 1980. 擦文文化. 北海道考古学講座. 7章. pp.151-182. みやま書房.
- 大井晴男 2004. アイヌ前史の研究. p.960. 吉川弘文館.
- 小野裕子 2007. 擦文文化後半期に関する年代諸説の検討. 古代蝦夷からアイヌへ. pp. 391-418. 吉川弘文館.
- 菊池徹夫 1980. 擦文文化の終末年代. 滝口宏先生古稀記念考古学論集「古代探叢」. pp. 573-592. 早稲田大学出版部.
- 越田賢一郎 2003. 北方社会の物質文化. 日本の時代史19. 蝦夷島と北方世界. pp. 90-125. 吉川弘文館.
- 越田賢一郎 2011. 擦文文化からアイヌ文化へ. 新版北海道の歴史. 上. 古代・中世・近世編. 第1章第5節. pp. 139-158. 北海道新聞社.
- 齋藤 淳 2002. 本州における擦文土器の変遷と分布について. 市川金丸先生古希記念献呈論文集「海と考古学とロマン」. pp. 267-283. 市川金丸先生古希を祝う会.
- 齋藤 淳 2008. 北奥出土の擦文土器について. 青森県考古学 16: 79-88.
- 齋藤 淳 2011. 古代北奥・北海道の地域間交流-土師器環と擦文（系）土器壘-. 海峡と古代蝦夷. pp. 131-185. 高志書院.
- 齋藤 淳 2012. 北奥における擦文（系）土器の終末について. 青森県考古学 20: 67-80.
- 榊田朋広 2016. 擦文土器の研究. pp. 1-349. 北海道出版企画センター.
- 澤井 玄 1998. 北海道北東部における擦文文化の拡散と終末について. 野村崇先生選歴記念論集「北方の考古学」. pp. 383-393. 野村崇先生選歴記念論集刊行会.
- 鈴木琢也 2005. 擦文文化における物流交易の展開とその特性. 北海道開拓記念館研究紀要 33: 5-30.
- 鈴木琢也 2006a. 北日本における古代末期の北方交易-北方交易からみた平泉前史-. 歴史評論 678: 60-69.
- 鈴木琢也 2006b. 擦文土器からみた北海道と東北地方北部の文化交流. 北方島文化研究 4: 19-42.
- 鈴木琢也 2011. 北日本における古代末期の交易ルート-古代中世の蝦夷世界. pp. 101-118. 高志書院.
- 鈴木琢也 2016. 平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容. 歴史評論 795: 16-27.
- 鈴木琢也 2020. 擦文文化と奥州藤原氏-北日本中世初期の交流史-. 北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌 Arctic Circle 116: 4-9.
- 鈴木 信 2004. 「アイヌ文化の開始と東北北部地域」に関する見解. シンポジウム「蝦夷からアイヌへ」資料集. pp. 73-74. 北海道大学総合博物館.
- 瀬川拓郎 2005. アイヌ・エコシステムの考古学. p. 245. 北海道出版企画センター.
- 高杉博章 1982. 擦文文化の終焉. 史学 52-2: 109-131.
- 塚本浩司 2002. 擦文土器の編年と地域差について. 東京大学考古学研究室研究紀要 17: 145-184.
- 中田裕香 1996. 北海道の古代社会の展開と交流-一〇～一三世紀-. 古代蝦夷の世界と交流. 古代王権と交流. 1. pp. 141-168. 名著出版.
- 平泉町教育委員会編 2019. 無量光院跡第37次発掘調査. 平泉遺跡群発掘調査報告書. 岩手県平泉町文化財調査報告書. 第132集. pp. 138-161. 平泉町教育委員会.
- 三浦圭介 2004. 本州北部の古代・中世社会から見た「アイヌ文化成立期」について. シンポジウム「蝦夷からアイヌへ」資料集. pp. 67-72. 北海道大学総合博物館.
- 八重樫忠郎 2016. 東北の経塚と厚真町の常滑壺. 歴史評論 795: 28-34.
- 山浦 清 1983. オホーツク文化の終焉と擦文文化. 東京大学考古学研究室研究紀要 2: 157-179.
- 山戸大知 2015. 北海道・東北北部における擦文土器編年の現状と課題-主に道央部・陸奥湾周辺の擦文土器の編年・年代観について-. 北海道考古学 51: 77-84.

Satsumon Earthenware Excavated from Hiraizumi Muryōkō-in Ato Preliminary Study on Cultural Exchange between Satsumon Culture Populations and Hiraizumi Populations

SUZUKI Takuya

This study investigates aspects of cultural exchange between Satsumon culture populations and Hiraizumi populations via investigation of factors such as excavation state, characteristics, and dating of earthenware excavated from Hiraizumi Muryōkō-in Ato. Further, based on dating of Satsumon earthenware excavated from Hiraizumi Muryōkō-in Ato, this study attempts to resolve the terminal dating of Satsumon earthenware.

These findings indicate that the Satsumon earthenware excavated from Hiraizumi Muryōkō-in Ato dates to the late 11th century or early 12th century. While it is conceivable that this Satsumon earthenware was not brought directly from regions such as Hokkaido and Aomori, this study posits that this premise would indicate cultural exchange

between Satsumon culture populations of Hokkaido or northern Tohoku region and Hiraizumi populations during the period of late 11th century to early 12th century.

Moreover, the earthenware excavated from Hiraizumi Muryōkō-in Ato belongs to the latter Late Satsumon period through Final Satsumon period. This Satsumon earthenware was excavated together with early 12th century ceramics such as kawarake and white porcelain, indicating the possibility that the terminal dating for Satsumon earthenware in Tohoku region is the early 12th century. These findings are prospective as important precedents for investigation of the terminal dating of Satsumon earthenware in Hokkaido.